

# □ 各地の音楽活動 ● 北海道

## 八木幸三

道内音楽界もコロナ禍に翻弄された1年であった。2月28日、北海道知事鈴木直道が全国に先駆け緊急事態宣言を出した。3月に一度収束したかのように見えたが、4月に入り札幌圏を中心とするクラスター（感染者集団）などで、第2波とも呼ばれる感染が拡大。再び緊急事態宣言が発せられる。そのため道内でのコンサートは2月下旬から7月にかけて軒並み延期または中止となった。8月に入り札幌交響楽団（札幌響）をはじめとする演奏団体がコンサートを再開したものの客席定員50%の入場制限や感染防止対策の徹底などが指示され、公演再開への大きな障壁となった。11月に入り50%の入場制限が解除されたものの、北海道は全国に先駆け再び急激な感染拡大となる第3波が到来し、12月時点でも収束のめどは立っていない。

まず、札幌は3月の定期演奏会をはじめ名曲シリーズなど76公演が中止・延期となり同団発足以来の異常事態に陥った。そのため2億8千万円に上る損失が発生。こうした中、コンサートに代わってライブ・コンサート「札幌映像配信プロジェクト」や休部中の吹奏楽部員に対して団員によるワンポイントアドバイスなどがネット配信された。また、楽団員との協演や招待券を返礼品とするクラウドファンディングやチームナックスのリーダー森崎博之が作詞作曲した「ともに生きよう」のオーケストラバージョンをクリエイティブオフィスキューと共同制作。その過程を北海道放送が放映し、さらに支援金も集めた。

5月から始まる予定だった札幌文化芸術劇場を会場とする「新・定期演奏会」が、奇しくもコロナ禍再開の口火を切った8月からのスタートとなった。名誉音楽監督尾高忠明がヴァイオリン独奏の注釈奈を迎えてメンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲とベートーヴェン／交響曲第5番を困難な世情に果敢に立ち向かう生命力を感じさせる演奏で、聴衆に勇気を与えてくれた。再開後の定期演奏会では来日が困難となった首席指揮者マティアス・バメルトに代わり友情客演指揮者広上淳一の雄渾なタクトが目を惹いた。代上は9、12月定期に登場し、伊藤恵とのベートーヴェン／ピアノ協奏曲第2番やゲルハルト・オピッツとのブ람ス／ピアノ協奏曲第1番などで優美な競演を繰り広げ、ストラヴィンスキーのバレエ音楽「ペトルーシュカ」でも大編成による華やかな響きを聴かせた。11月定期からは、観客数の制限を解除して下野竜也が、生き生きとした極彩色のマーラー／交響曲第5番を創出。前半で歌曲集「少年の不思議な角笛」を歌った藤村実穂子の深遠な歌唱が印象深かった。他に「札幌・北海道応援コンサート」では、札幌出身の横山泰が深淵とした指揮で管弦楽を纏め上げていた。難病(ALS)で退団した前コンサート・マスター大平まゆみは、第74回北海道新聞文化賞と令和2年度北海道文化賞を連続受賞した。

パシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)は30年の歴史の中ではじめて中止が決定された。そこでPMF関係アーティスト、修了生などが演奏動画、メッセージ動画を集めてシェアするプロジェクト「PMF Connects」が立ち上がった。ネットを駆使し、遠く離れた仲間とのアンサンブルをはじめ、家族や友人との演奏など様々なパフォーマンス動画をPMFのウェブサイトでリンクし、フェイスブックやインスタグラムなどで世界に発信した。ベルリン・フィルのホルン奏者でPMF教授のサラ・ウィリスが5カ国のホルン奏者でオンライン・チームを再結成したのをはじめ、他に50以上の動画が寄せられた。多くの修了生などが各国からオンラインでアンサンブルを奏する画像を見て、離れている仲間でも音楽でひとつに繋

がることを実感。また、例年の開催期間中に配信された「PMF Connects 2020 Summer Festival」では、25日間で延べ87カ国・地域、約4万8千人の人々がオンライン演奏を楽しんだ。さらに9月からPMF修了生による無料コンサート「PMF Connects LIVE!」をシリーズ化し、札幌市内の様々な場所で開催。初回は、大通公園で札幌在住の演奏家を含めた弦楽四重奏や金管五重奏のステージが展開された。

札幌コンサートホール・キタラは2月下旬から公演は軒並み中止となり、同館の専属オルガニスト、アダム・タバイディは4月からメッセージとモーツァルト作品の演奏を配信。札幌文化芸術劇場は同劇場を含む札幌市民交流プラザが閉鎖される中、公式YouTubeで2月に主催公演したオペラをロックで聞かせる「クリエイティブ・オペラ・ミックス」を無料配信した。さらに札幌在住の若手音楽家による独自のネット配信も加わっている。フルート奏者の立花雅和は、友人音楽家とのアンサンブルを毎週金曜日に「YouTube・ライブ・コンサート」として、マリンバ奏者の香野勢津子はフェイスブックからトロンボーンとの共演などを自宅から配信。こうした活動は今後のコンサートでの観客動員にも繋がるのが期待される。

北海道文化放送は5月2日に札幌をはじめ北海道ゆかりのアーティストの演奏をインターネット番組「NUDEな音楽at home」として配信した。札幌市は市内の文化芸術公演活動を支援するため、無観客公演を動画配信する札幌市文化芸術公演配信補助金「さっぽろアートライブ」をおこない、広いジャンルで応募があった。クラシック音楽分野では10組ほどが採用され、その中でもオペラ団体「LCアルモーニカ」は、邦人の短編オペラ2作品を屋外撮影も含め上質な演奏と映像で配信した。

7月頃より感染予防対策をとりながら徐々に開催されるようになったコンサートで口火を切ったのが「クアルテット・エクセルシオ」。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第15番などで濃密なアンサンブルを聴かせた。地元音楽家ではベテランチェロ奏者文屋治実が8月にピアノ三重奏シリーズ「BUNYA TRIO」でショスタコーヴィチ作品などを熟演。さらに12月にはピアノの新堀聡子を伴い、全曲ベートーヴェンによる精力的なりサイトを開いた。

9月からはコンサートの回数も徐々に増え、クラリネット奏者の河野泰幸、ハーブ奏者の武川奈穂子という珍しい組み合わせで、南聡の「音響版画」などオリジナル作品も含めた興味深いプログラムで2つの楽器の魅力を伝えた。札幌首席オーボエ奏者関美矢子によるリサイタルは、バッハからピアソラまで多彩な曲目でエンターテインメントなステージを展開。小樽市出身の針生美智子がデビュー25周年を記念してのリサイタルは、札幌大谷大で後進の指導にもあたるピアニスト外山啓介と共にロッシニーとモーツァルト作品を豊饒なソプラノで聴かせ、チェロ奏者中島杏子は札幌を拠点に活動を始めて10周年のリサイタルでメンデルスゾーンのソナタなどを覇気のある響きで演奏した。近江宏は自作チェンバロを用いて「ゴルトベルク変奏曲」を真正面から取り組み、その誠実な演奏で典雅なバッハを創出した。若手ピアニストの活躍も目立った。石原優香の初リサイタルは、武満徹、三善晃の邦人作品が秀逸で、石原同様道銀芸術文化助成事業の支援を受けた徳田貴子も「幻想曲のタペ」と題したピアノリサイタルを開催した。新進演奏家育成プロジェクトリサイタル・シリーズSAPPROでは、1月に水口真由がピアノ・ソナタを中心に存在感のある演奏を、12月には岩田真由美がスクリャービンのソナタなどで繊細で神秘的なピアノの音色を聴かせた。

コロナ禍前では、1月に北海道教育大学・実験劇場が「箱館戦争」シリーズの完結編「北海道開拓使」を同劇場総監督の塚田康弘の台本・演出、二宮毅の作曲で上演。映像や照明を効果的に用いて、観客を苦難の開拓時代へと誘った。